

「身じまい」のおと



滝野隆浩

社会部編集委員

◎若林健次

前回、世界45カ国のお墓を見て回った聖徳大学の長江曜子教授(61)からヨーロッパの旅に誘われた、と書いた。もちろん一緒に旅行に行くわけではない。先生の「欧米メモリアル事情」という本について聞きながら、旅した気分になるのだ。一番安上がりだし。

「彫刻の国」イタリアからはじまり、「芸術の国」フランス、「森と湖」のスイス、「ゆりかごから墓場まで」のイギリス。そして福祉の最先端をいく北欧3カ国に、最後は葬送ビジネスが確立しているアメリカへ。歴史も国民性も違えば、お墓は当然違ってくる。

先生は、もともと文学の研究者だけあって、墓を見るときも目の付けどころが文学的である。パリ南部のモンパルナス墓地には、ここには書き切れないほどの偉人や芸術家が眠っている。中でも哲学者サルトルとポーワールのお墓の話がいい。サルトルの没後約6年長く生きたポーワールは、自らの意思で同じ墓穴に入り、「サルトルのひつぎの上に眠っている」という。なんだか、すごい。

それから、近くにある詩人ボードレールの墓には黒のネクタイと万年筆が供えてあった。人はいろいろな思いを抱いて会いに来る。あとはモーパッサンと

欧州の墓地「期限付き」が浸透

かサン・サーンズとか……やっぱり書ききれない。

欧州の墓地の多くは自然豊かで、森林の中にあったり、季節の花が咲き乱れたりしている。観光資源といってしまうは身も蓋もないが、そこには歴史や文化を背景にした、「墓づくり」に対する強い意思を感じる。単なる遺骨の置き場ではなく、「安らかに眠れる幸せな場所」なのだ。先生は「これこそ、ヨーロッパの底力なんだろうね。長いスパンで物事を考えている」と話す。

キリスト教文化の影響で、ヨーロッパでは1990年代までは土葬が多かったという。遺体を骨にして大切にする日本と、そのままひつぎに入れて土葬する一部のキリスト教圏。「死」に対する向き合い方も違ってくるのだろうか。そのヨーロッパでも、最近は少しずつ火葬が増えているらしい。

先生はスウェーデンの森林墓地にある教会で、こんなラテン語の言葉を見つけた。△今日は私である。明日はあなたである。生と死は地続き、ということだろう。奥深い。

もうひとつ。ヨーロッパ各国の墓地には「期限付き」のところが多いことに気づかされた。長さは国によって異なるが、墓地は有期限の「賃貸契約」だという考え方が浸透している。10年、20年で「亡くなった人の魂が落ち着く」といつかなくなるのか。時期をすぎれば更新され、別の人に再貸し付けされる。日本もこの方向で考えたほうがいいかもしれない。でないと、国じゅう墓だらけになる。

次回は、大西洋を渡って新天地アメリカに。これがまた、なかなか興味深い。